

## 浮かび上がる東アジア4都市の乳幼児の父親像 ～「上海>北京」vs「ソウル>東京」の構図は、どこからくるのか～

国立教育政策研究所総括研究官 一見真理子

東アジア4都市の子育て中の父親を回答者とするこの調査結果を、大変興味深く読みました。東アジア圏内の比較の観点から、大まかにではありますが、若干コメントしたいと思います。

ベネッセ次世代育成研究所では、実はこの調査に先行・並行して、東アジア5都市（この場合は、台湾の台北市も含む）の『幼児の生活アンケート』を2005年と2010年の2回にわたって行っています。こちらは、主に母親が回答しているアンケート調査で、幼児の日常の生活時間、幼稚園・保育所への要求、メディア接触、おけいこごとの実施状況、母親からみた子育てで大切にしたいこと、父親の家事・育児参加の状況、などが取りあげられています。この調査と今回の父親調査を合わせてみると、子育ての状況がより立体的に理解できます。ともあれ、元来、教育熱の高い東アジア圏ですので、回答者がお父さんであっても、お母さんであっても、ともに子育てに積極的・肯定的な感情を持っている共通傾向が出ていることをまずは大変頼もしく思いました。たとえば、本調査のデータでは、このアンケートに回答した東アジアのどの都市のお父さんたちも、その9割強がどちらかといえば「子どもを育てるのは楽しくて幸せなことだ」と感じており、「子どもがかわいくてたまらない」としています。これは、私たち文化圏の特色でもあり、誇るべき美点といってもよいでしょう。またその当然の裏返しになるのですが、教育における競争の過熱がもたらす教育費の高騰問題も重大です。各都市のお父さんたちは、共通して「父親としての将来の不安」の筆頭に、「将来の子どもの教育費用が高いこと」、その次に「育児費用の負担が大きいこと」をあげています。

父親調査の各質問項目への回答をみていて、冒頭にあげた2回にわたる母親調査と共通してみてとれる傾向のあることに気づきました。それは、中華圏（ここでは北京・上海）の2都市と、それ以外の首都（ソウル・東京）の親の置かれた状況と意識が、かなり異なっているという点です。これは社会背景の違いが原因なのか、それとも、民族性の違いに由来するのか、興味深い点です。

ここで中国の2都市に共通する社会背景は、1) 政府の30年来の政策にもとづく、親も一人っ子世代に移行する時代の一人っ子の子育てである、2) 女性の労働参加率が高く、したがって夫婦共働き率が高い、3) 以上の結果として、育児の負担を夫婦および異世代間、社会でシェアできている、4) 以上の結果として、帰宅時間・日常の家事・育児参加時間を含めて、父親の生活時間に比較的ゆとりがある、という点です。

1) は、対象の父親の平均年齢と子どものプロフィールに明らかです。2) については、社会主義国である中国の2都市では、90年代に計画経済から市場経済化への一大転換があり、リストラの嵐が吹き抜けた現在でも、このアンケートの回答者の妻（子どもの母親）の正規雇用率は80%前後となっています。一方で、ソウルと東京の場合、母親の正規雇用率はそれぞれ約30%、20%未満で、ともに男女共同参画に努力している都市ですが、実態は中国の2都市とは大きく異なります。

3) についても、夫婦間の状況をみると、中国の2都市のほうが、育児上のさまざまな選択（たとえば何を購入するか・どんなサービスを選ぶかの決定）についても、父親が母親と対等か、それ以上に参与していることがわかります。ソウル・東京では、ここまでの育児参加をしていません。また、祖父母とのかかわりの項目の結果から読みとれるのは、中国の2都市のほうが、祖父母世代との同居率が高く、またその育児参加率もソウル・東京よりも圧倒的に高くなっていることです。また、ソウル・東京では、子どもを預けるなどの育児支援は、妻の母親（祖母）から受ける比率が高い傾向ですが、中国の2都市では、夫側・妻側のいずれの祖父母からも、さまざまな育児支援を受けています。

4) については、北京・上海の父親は早出早帰り、出勤時間のピークはソウル・東京よりも早出し、帰宅時間のピークもソウル・東京よりも2時間以上早くっており、夕方17時台、どんなに遅くとも19時台には帰宅できている父親がほとんどです。このためか、概して、北京・上海の父親のほうが、自分のための趣味、子どもと一緒に楽しむ趣味にも圧倒的に取り組む時間的余裕があり、また東京・ソウルでは数値があまり伸びない、地域活動やボランティア、自分自身の生涯学習に取り組む時間もとれています。

同じ国の都市だけに、北京と上海での調査結果は、どの項目の回答も同傾向を示しましたが、調査結果を詳しくみると、上海の父親のほうが、より子育てや自分のための活動などに積極的に取り組んでいる様子がみうけられます。これは、「OECD生徒の学習到達度調査 (PISA)」2009に上海が特例として中国から参加し、あらゆる領域でトップの成績を取ったことも考え合わせて、興味深い点です。ちなみに上海は、生涯学習政策や教育課程改革政策でも中国の中で独自の地位を示す特例的な先進都市であり、首都北京とともに、学歴・資格取得のための成人の生涯学習への参加の条件が整えられてきました。また一人っ子政策ともリンクして、父親と母親の親役割を全うするための各種講座も非常に盛んです。若い父親が、労働時間・生活時間を妻や職場の同僚女性ともシェアしながら、自分自身の継続学習や技能獲得のための研修活動に日常的に参加し、乳幼児期からの子どもの学習にも熱心に参与している姿が浮かびあがります。中国の2都市での、理想の父親像に「物知りであること」があがっているのも、子どもに知的刺激を与えるよき存在でいたい、という共通の強い願望があるからでしょう。

4都市の対照的な父親の育児参加の構図を、「夫婦共同か役割分担か」の軸、「日常的参加か非日常（休日のイベント）的参加か」の軸でみると、中国の2都市は、「夫婦共同・日常的参加」であり、ソウル・東京の場合は、「役割分担・非日常的参加」タイプといえるでしょう。とはいえ、ソウルの場合には、回答から夫婦のきずな、親子のきずなに熱くなる、いわば家族の濃い「情」を感じさせる父親像が読みとれるのに対して、東京のデータからは、東アジア圏内でもっとも生活にゆとりがなく、したがって子育て行動の点でも意識の点でも、もっとも淡々とした回答をする父親像が現出しています。この調査結果は、背景をさらにさぐるきっかけとして検討されるべきであり、とりわけ、東京のお父さんのワークライフバランス回復への一助として、多方面に活用されることを望みたいと思います。